

“いのち”を紡ぐコース

〔概要〕：私たちの願いは、住み慣れた地域で暮らし、地域を終の棲家として「いのち」を終えたいというものですし、状況さえ許せば家族としてもそれを支えたいという思いがあります。本コースでは、充実した形で「いのち」を全うすることと、在宅や地域で生を終えることを支える人たちの双方の関係性を損なわないようにするための視点や様々な知識などについて一緒に学んでみたいと思います。

(全10回)

〔対象〕：臨床生・死学（死生学）を拠り所に”いのち”について考えることに関心のある方

〔講師〕：吉川 眞（広島国際大学 客員教授）

日時／会場	講座名	講座内容
1 5月13日(土) 13:00-15:00 (呉)	家族の介護負担軽減を図るため、又、相続トラブルを引き起こさないためのポイント	介護を必要とする人の生きがいを支える在宅ケアを行おうとすることに伴う介護する側の心身の負担を軽減するための住宅改修について、また、要介護・療養者が亡くなった後に相続等で家族間でトラブルが生じないようにするための基本的な知識について、学んでみることにしましょう。
2 6月3日(土) 10:00-12:00 (呉)	認知症を理解し、関係を“紡ぐ”対応ができるようになるためのポイント	家族介護で一番悩まされるのは認知症を発症した家族にどのように対応すれば最善なのかということです。もちろん、認知症は病気だということは分かっていますが、人が変わったように思われる言動が出始めると、家族は否認、怒り、抑うつ、諦めといった感情を抱えることになり、大きなストレスを抱え続けます。でも、それは当事者も同じで、自分に対する家族の態度・対応が変わったことに気づくと、同じような感情、同じようなストレスを抱えてしまい、最悪の場合、家族関係は破たんしてしまいます。そこで今回は、家族としてつなげる時間が残り少なくなってきたことを示す認知症状、家族としての“いい”関係を新たに紡ぎ始めるためには“厄介”と思っている認知症状にどのように対応すればよいかについて、一緒に学んでみましょう。
3 7月1日(土) 10:00-12:00 (呉)	病院・医療者をピンにするもキリにするもしないも、あなた次第	ご存じのように、今の病院はその機能ごとに長く入院できるかどうかが決まる仕組みによって縛られています。トコロテンではないというクレームが患者・家族から出てくるくらいに、特に国立や大学病院をはじめ療養型の病院以外の医療機関では、入院したその日から退院日の目安を立てて治療に取り掛かると言っても過言ではありません。でも、そうするには“それなりの理由”もあるのです。病院の評価は、“それなりの理由”と患者・家族の期待とのギャップをどれだけ少なくすることが出来るかで決まります。そこで今回は、医療スタッフの質を高め、患者・家族の思いに耳を傾けさせることでギャップを少なくし、最善の医療を受けるためには患者・家族としてどのような点を気を付ければよいかについて、一緒に学んでみましょう。
4 8月5日(土) 13:00-15:00 (呉)	臨床生・死学事始め①：一人の命と五人の命、優先的に手を差し伸べるとすれば、どちらの命ですか？	幾つかの事例を通して、傍観者である自分と当事者である自分の両方の視点を通して、「死なせる」と「殺すこと」について考えてみたいと思います。ただし、「死なせる」と「殺すこと」の善・悪を明らかにすることを主眼とは致しませんし、正直、善悪を明確にする力量は持ち合わせておりません。あくまでこの回の目論見は、自・他の「いのち」の重さに焦点を当て、市民大学生それぞれの立場から考察を深めていただくこと内容に力点を置いて進めてみたいと思っています。
5 9月9日(土) 13:00-15:00 (呉)	臨床生・死学事始め②：「いのち」について	死を考える・生を考えることは、言うまでもなく自身の死生観があつてこそです。が、皆さんは、死生観をお持ちですか？ポヤっとしたものなら持っているけど、具体的に言えと言われると…と、返答に窮されるのではないのでしょうか？さらには、死生観という自分自身のものと考えがちですが、ご家族がおられるのであればそのご家族のことも踏まえたものしておくことが大切です。そうすると一層、言葉が出なくなるのではないのでしょうか？そこで今回は、「いのち」について、誕生から死までのプロセスを辿りながら、（家族のことを踏まえた）ご自身なりの死生観をもつ、あるいは見直すための基本的な知識、視点について、一緒に学んでみましょう。
6 10月7日(土) 10:00-12:00 (呉)	臨床生・死学事始め③：「人工妊娠中絶」を通して生死について考える	年間16万人以上の人工妊娠中絶が行われている日本にあって、その女性の多くは周囲に相談できないまま決断を迫られ、心身に大きな負担が掛かる手術を経て罪悪感を強めているというのが現状です。さらに、その背景にある「中絶を道徳の問題」と捉え、「自業自得」とみなす風潮が強く影響します。ここでは、「命」という視点から母子関係、家族関係における生・死について考えてみたいと思います。
7 11月11日(土) 13:00-15:00 (呉)	臨床生・死学事始め④：「死すべきものとして生きる」とはどのようなこと？	“良き生と死”という言葉があります。“より良い死”を迎えるためには、“より良い生”を生きることが大切です。もし、それまでの人生でやり残してきたものがあり、それをそのままにして終わらせたくないというものがあれば、それが、良き死を迎えるために死すべきものの“最後の仕事”として取り組むことが大切です。そこで今回は、フランクルの「夜と霧」を紐解きながら、人間の生・死を考えるとともに、人生を締めくくる「最後の仕事」とはどんなもので、どのように取り組めばよいかについて、一緒に学んでみましょう。
8 12月2日(土) 10:00-12:00 (呉)	臨床生・死学事始め⑤：臨床現場に見るさまざまな死・生の際からの学び	医療の現場においてはさまざまな“死にざま”はもとより、残された時間に対する“生きざま”に出会います。もちろん、その“さま”は人それぞれであってよいのですが、自分が願う“死にざま・生きざま”を果たすためには、“さま”についての意思表示をすること、その意思表示に対して家族間の理解が統一されていることがとても大切です。しかし、平静時に予め合意を得ていた方向性も、一刻を争うような病状に陥った家族の生命を握る立場になった時には、あたかも暴風雨の中で立ちすくんでしまうかのような状態に陥るといえるのが実際ではないでしょうか。そこで今回は、生命倫理の立場から、どのように考えれば死にざま・生きざまを支えることが出来るかについて、一緒に学んでみましょう。
9 1月20日(土) 13:00-15:00 (呉)	臨床生・死学事始め⑥：誰もがホッとできる“終焉”を迎えるために	家族が急に亡くなった場合はもちろん、長期にわたって療養生活を送った後に亡くなった場合であっても、また、それが病気あるいは自死、被害・災害死かどうかによっても、残された家族のグリーフ(悲嘆)の程度も引きずり方もさまざまです。もちろん、それまでの家族関係も大きく影響を与えるとは言ってもありません。そこで今回は、在宅・施設で看取りにとどまらず、さまざまな死に遭遇した家族の悲嘆と立ち直りについて、さらには、見栄を張らない葬儀のあり方について、一緒に学んでみましょう。
10 2月3日(土) 13:00-15:00 (呉)	臨床生・死学事始め⑦：悲嘆を乗り越え、充実した日々を送るには【座学と演習】	終末期にある患者・患児とその家族に関するいくつかの事例を通して、残された日々の“生”の質をどのようにすれば高めることができるか、また、“自分”なりの“死”を迎えることができるか、残された“生”を家族が支えることの難しさについて一緒に考えてみたいと思います。また、演習“死にゆく道程”を通して、喪失に関する疑似体験をしていただくと思います。

【留意事項】

・開講日は月1回程度で、第1土曜日（呉キャンパス：10:00～12:00）を予定しております。